

(同称十念)

お釈迦様がお生まれになりましたインドにおきましては、四月十六日から三カ月は雨の時期でございます。修行者はその雨の時期には、あちらこちら遊行して回ることが不便であるし、小虫等を踏み殺す恐れもあるので、道場とか小屋、或いは岩窟とかで専心に修行するわけです。それが終わりますと七月十五日です。私共がお別時が終わりました後座談会をしますように、七月十五日にその安居中にお互いに犯した罪を告白して許しを乞う厳肅な作法があり、それを自恣し日と申します。

沢山お弟子がいらつしやいました中で、優れたお弟子が十人ありまして世に十大弟子と申します。特にその中でも智慧第一の舍利弗、神通第一の目連、その神通第一の目連尊者が、先ず自分のお母さんは死んで一体どこにいるのか、ということを見届けようとししました。処がお母さんは、驚いたことに餓鬼道に堕ちておりました。肉落ち骨やせ、青白い皮はやつと五体の骨を包んでおり、それでもがき苦しんでいるのを知りました。

今夏のように暑い時は、私共は冷たい水を甘露だといって頂きます。阿弥陀仏如来を甘露王如来と申しますが、甘露—不死・永遠の生命を意味する梵語、アミリタの訳。弁栄聖

者は「釈尊はアミリトの糧をもつて法身慧命を養い給う（『ミオヤの光』応現の巻十五頁参照・昭和六年十月刊）」と言つていらつしやいます。それは念弥陀三昧の中に享受するものであります。私共は冷たい水を甘露だといつて喜びますが、餓鬼の世界は実にひもじゅうございまして、水を飲もうとしますと火となつてしまいます。古来一水四見と申しますように、天人と人間と畜生と餓鬼は同一の水を見ても見え方が違います。それは見る者の心が違つからず。

そこで目連は神通力を使いまして、鉢に飯を盛り母の許に行き、持つて行つた鉢の前に置きました。お母さんは喜び直ぐ手を伸ばして口に入れようとしたが、忽然として火炎となつて口に入れることが出来ませんでした。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道の世界はそれぞれ別の次元の理法が働いている世界です。それで目連は非常に嘆き悲しみまして、お釈迦様にどうしたらお母さんを餓鬼道の苦しみから抜くことが出来るかとお伺いしました。するとお釈迦様は「七月十五日は自恣日であるから、この聖日に母のためによりしく十方衆僧に供養してその回向をして貰えよ」と仰せられました。果たして母は一劫餓鬼の苦しみから逃れることが出来たと申します。

お盆はウラ盆と申します。今、日本では新暦ですが、旧暦の方が時節としては当たっております。関東では新暦で七月にお盆をしますが、関西は八月の旧暦でございます。一カ月の月遅れ盆をするのです。新潟県・北陸方面は旧暦・新暦両方があるようです。

お盆とはどういうことかと申しますと、日本ではお盆の上に色々のご馳走を載せてお供えするからお盆といふのかというと、そうではありません。正式には盂蘭盆ぼらんぼんと申しましてサンスクリットのウツランバナです。逆様に吊り下げられている苦しみを救う、という意味です。逆様に吊り下げられたという経験はありませんが、これは大変辛いものだそうです。だからそれを助ける、そういう餓鬼の苦しみを救うというのが、ウツランバナです。それを音写しまして盂蘭盆ぼらんぼんとなったのです。

何故そのような餓鬼の業をお母さんが作ったのかということですが、我が子目連のために必要以上の貪りの心を起こして、終に餓鬼の業が熟して餓鬼道に堕ちたのです。そこで目連は自分のためだと、嘆き悲しんだということでございます。

この世の中で餓鬼の心を起こすと、生きながら餓鬼の業を作ります。十分業熟して死ぬと餓鬼道に堕ちる、とこういうわけであります。私共が餓鬼の業を作つてその種蒔きをし

ます。私共には外側の外面世界に蒔く外種がありますが、またアーラヤ識——今の心理学で言うところの深層心理という、意識の奥にある無意識の世界、そういう内面の世界に蒔く内種もあります。そして餓鬼の業の種を蒔く。つまり内種を蒔くと餓鬼の業が習慣となつて、やゝともすると餓鬼の心しか起こらなくなり、いわゆる習慣的意志活動となります。

人格の中心は品性である。品性とは習慣的意志活動だ、とある有名な心理学者が言っています。そういう習慣的意志活動になつた時、仏教では業と申します。目をパチクリするのも仕業ですから、業でございます。サンスクリットではカルマと申します。けれど目をパチクリしたからと言って、悪い仕業であるかと言いますと、悪くもなければ善くもありません。そういう業もあります。自分の座る椅子の上に虫が飛んで来て止まっています。そこに座りました。すると虫が死にました。殺生じゃないかと言うが、私は殺してやろうと思つたわけではないから、こういう業は報いを引きません。

処が報いを引く業がございます。例えば今の目連のお母さんは、餓鬼の業を大いに作りました。そして生きながらだんだん人間の人格から餓鬼格へ進んでいったわけです。それで死ぬば餓鬼道に堕ちるということになります。このように種蒔きの因とその報いの結果

と、時間は異時だということになります。憎いやつだと思つて手を出して横面を張つたり、バカヤロウと言つたりしましても、その怒つたときは刹那です。その刹那を念と申します。その鬼の心・餓鬼の心は刹那だけれど、その時は一刹那であつても鬼になつたり餓鬼になつたりしています。しかし人格が鬼になつたり餓鬼になつたりするには、相当これを繰り返すことが必要です。一念起こせば一念の鬼、一念起こせば一念の餓鬼です。これは同時因果です。これを繰り返していると、人格が正真正銘に鬼になつたり餓鬼になつたり致します。種蒔きするのが先、人格がそうなつてしまふという結果は後です。これは異時因果です。そして死ぬとまさしく地獄道・餓鬼道に墮ちるといふわけです。

そこで目連は嘆き悲しんで、お母さんを餓鬼の苦しみから救いたいと思ひまして、お釈迦様に教えを乞いました。するとお釈迦様は「七月十五日に修行が終わる。その自恣日に現前の衆僧、四方十方の衆僧の力を借りよ。つまり供養し回向して貰えよ」とおっしゃいました。

日本ではいろいろな物を上の段下の段と棚を作つて盛大に供養するようになりまして、しやうりょうだ精霊棚と言ふようになりました。そしてお寺さんが参つて来て、祭壇の前で読経するの

を柵経と言うようになりました。

それで「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」と古歌にもありますように、目連のお母さんは餓鬼道に堕ちられました。昔からの名高いお話でございます。

十年前の八月十二日に、日航ジャンボ機が群馬県上野村の御巢鷹山の尾根に墜落して、五百二十人の人が亡くなりました。事故後造られた「慰霊の園」には犠牲者一人々々の名前を刻んだ石盤があります。十年間、日航が慰霊祭を毎年催しておりましたが、今年で打ち切りとなりました。しかし遺族の方々にとっては、打ち切りということはないのです。

これは心の問題です……。いざ飛行機が出ます。それに乗り合わせる。そして五百余人の人が亡くなりました。それを共業と申します。その中から助かった人もなきにしもあらずですが、それで業に他と共通した結果を引き起こす業と、又他と共通しない結果を引き起こす業とがある。即ち共業と不共業とあることを認めざるを得ません。

現在、奈良でお医者さんを開業していらつしやる松岡さんという方が、奈良から近鉄電車に乗りました。特急に乗りましたが、その列車が途中の西大寺駅で止まった時、急に降りたいという気が起こって、あとの準急に乗り換えました。処が先の特急はエアプレーキ

も、手動のブレーキも利かなくなりまして、生駒トンネルを暴走して脱線しました。沢山の死傷者が出ましたが、その先生は災難から免れることができました。その理由は「なぜ？」と言われてもご本人にも分かりません。

私共は「良かったですね」と申します。この世のいろいろな予期せぬハプニングやアクシデントに巻き込まれると、その巻き込まれたことを、アリストテレスは「偶然」と申しました。こういう偶然は人間の理性では中々その原因を明らかにできない。けれど明らかにできないということは、原因についての無知の致す処だと、こういうふうに言っている哲学者があります。皆さん如何お考えですか。

狸の置物で有名な江州の信楽で、陶器のお祭りがありました。その期間中に信楽鉄道が脱線して沢山の人が亡くなりました。私の住んでいる芦屋の隣りの西宮の鳴尾の或る奥さんが、身内の方々とそのお祭りを見に行きました。一行は京都駅で乗り換えたのですが、五分遅れたために予定の列車に間に合わなくて、その結果事故に遭わないで助かりました。事故を知った家族の人、親類の人が集まって来て「大変だ、大変だ」と心配して長男の方が信楽に電話しましたが、混乱していて分からないということでした。そこでご主人が「そ

れじや、俺行つて来る」と出かけました。処が奥さんは五分遅れたために、沢山の身内の方々と一緒に助かりました。家に帰つて来たら、家族や親類の人にすぐ叱られました。

「これほど心配しているのに、電話かけてこないのは何事か」と。「それは鳴尾にいるからそうなのですよ。その場にいたら電話かける処の騒ぎじゃない」と答えました。遅れて却つて助かったということになりました。

見通すということは、中々私共に出来ないわけです。先程御巢鷹山の事故の話をししましたが、それに乗ろうとしておつた会社出張の方が、飛行場でコーヒを飲みたいという気が起こり、次の飛行機にしました。すると若い女学生が代わりに乗つて行きました。一方は助かりました。他方は事故に遭いました。

最近は少し収まりましたが、九州の雲仙普賢岳で火砕流により沢山の方が亡くなりました。新聞記者が写真を撮りに行きましたが、又噴火して火砕流が流れ出しました。「これはいけない」といつて逃げました。しかし火砕流が自分の処に近づいて来るので、山の上に登りました。低い山に登つた人はダメでした。高い山に登つた人は助かりました。こういうように共業と共に不共業がございます。



「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」。常に自分の子どもを他人の子どもより大事に思う。うっかりすると盲愛となります。こういうのは肉の愛です。聖者がおっしゃった表現から申しますと、「天性の愛」ということになります。「物いはぬ四方のけだものすらだにも哀れなるかなや親の子を思ふ」。源実朝の金槐集にございます。処が人間でありながら、生まれた子どもをポイと捨てる人があります。これは禽獣にも劣るといふことになります。だから人間は鬼にもなる、しかし仏にもなる。そういうのが人間です。そういう意味で私共は、自己の心の奥底に備わっている靈性・仏性を開発すること、人生の目的だということになります。

理性の愛というものがございます。カントなどがそうでございます。哲学を愛して一生独身でした。聖者はこれを真知を愛する―愛真知と申されました。

笹本上人様がよくお話しになっていらっしやいましたが、昔『キング』という雑誌がありました。それに載っておったそうでございます。北野元峰という曹洞宗の禪師様があつて、後に管長さんにもおなりになりました。小さい時に、小僧さんになってお寺に行くということになりました。小さい坊やが紅葉のような手を着いて、お母さんに申しました。

「一生懸命修行してきつと立派なお坊さんになります。けれど途中から道を踏みはずしてとんでもない悪い者になったら、二度とお母さんの処には帰って来ません」。そこでお母さんが涙をお流しになって、「立派なお坊さんになっておくれ。しかし立派なお坊さんになったならば、お母さんの処に帰って来なくてもいい。道を踏みはずして、人に迷惑をかけ、人からゲジゲジのように嫌われて誰も相手にしてくれなくなったという時は、お母さんのことを思い出してお母さんの処に帰っていらっしやい。きつといい人にして上げますから」。こう言われました。こういうのが実に母親の慈悲です。中々優れた慈悲です。痴愛、盲愛であつてはいけません。

それから三十年近くお母さんに会いませんでした。東京の芝の青松寺の住職になりました。青松寺は曹洞宗の名門です。ボンクラ者ではとても住職になれません。その時、国許から通知が来しました。お母さんは寄る年波で床に着かれた、いつ何時亡くなるかわからない。どうぞ会いに帰って下さい。そこでわらじを履いて故郷を指してお帰りになりました。自分の生家の敷居をまたぎまして、お母さんは大丈夫かと聞かれました。すると大丈夫だ、間に合つて良かったということでした。そこでお母さんの処に行つて言われました。「お

母さん、いかがですか。私です」。お母さんはじーつと我が子の顔を五分間程見ていらつしやいました。私共が如来様をじーつとお見つめしようとする心は散乱しますが、お母さんは五分間じーつと見つめられました。そして言われました。「この三十年の間、雨降るにつけ風吹くにつけあなたのことを忘れたことはありません」。これがありがたいわけです。如来様は私共の本元の真実のオヤ様です。久遠劫来、私共のことをお忘れになったことはありません。世の親でございましてもこういうことなのでございます。

元峰老師は後に曹洞宗の管長になりました。管長になると、この地方あの地方と管長が自ら布教・伝道なさる、御親教というのがあります。急にある監獄から「この地方においでになったのであるから、是非ともお話を承りたい」と言つて来ました。するとお付きの人が言いました。「何せ管長さんはお年だから、予定外に急にそんなことを言われても困ります。日程は差し繰りできません」と断りました。しかしそれを聞いておられた管長さんは「いや、行こう」とおっしゃいました。周りは心配しましたが、そこにおいでになりました。講壇に立つてこう言われたそうです。「あなた方は仏の子です。仏の子は仏性を持っています。仏の子で仏性を持っている者が、こんな所に来るものじゃありません」。

そう言つて涙をお流しになりました。そこに集まつた人達に、大變な感動を与えました。百千万言の説法に勝る訳です。そのように非常に尊いお方でありました。

こういうのは理屈ではなく情だと言えます。情を失して、悟りを開こう悟りを開こうと力む場合があります。光明主義では、禪宗を入れた自力聖道門を哲学的宗教と言つておりますが、自力聖道門ではとかく情を軽く見やすいのでございます。そうであれば悟り開くためには、必ず持戒堅固でなくてはなりません。けれど中には元峰老師のような方もなきにしも非ずです。哲学的宗教である禪宗においても、そうであります。

百人一首に小式部内侍の歌があります。「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」。和泉式部の娘さんですが、お歌がとても上手でした。処が世に名高い和泉式部の子どもだから、「お母さんが添削しているのだ」と人は疑つていました。宮中で突然、お歌会が催されることになりました。小式部内侍が宮中にいると、藤原定頼がやって来ました。その定頼が言うのには「お母さんから返事がありましたか」と。急にお歌会がある。自分の作つたお歌をいつもお母さんに添削してもらつているのだらう。処がお母さんはお父さんと共に丹後に行つてゐる。お母さんに添削してもらつて返事をもらう暇がない、あ

なた困っているでしょう。こういう意味です。定頼は歌壇の大御所の藤原公任の息子さんです。それでそういうふうには冷やかしたわけです。

すると小式部は歌で答えました。「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」。これを見て定頼は、「アツ、これはお母さんに似て天才だなあ」とびっくりしました。お父さんが公任だからやはりその子である定頼も歌が上手でした。一条天皇様が沢山お供を連れて嵐山に行かれました。処が天気続きで大堰川が干上がっていました。天皇様は歌を作れとおっしゃいました。定頼はまだ小さかったけれど、お供していました。それで「水もなく見えこそわたれ大堰川岸のもみじは雨とふれども」。天皇様を始め、皆拍手喝采しました。百人一首に出ている歌は定頼の傑作です。「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木」。

和泉式部の御主人の保昌は猟が好きで、休みになると山へ行つて鹿を追っていました。殺生はいけませんが今生はこれをしないと生活が立たないという人は、如来様の他のお戒めは守るからこれだけは堪忍して下さい、と言つたならば如来様は許して下さい。これを全受分持と申します。処が御主人の猟は遊びの一つです。和泉式部がいくら諫めても中々

止めません。それで御主人が獵に行った留守に、歌を書いて机の上に置いておきました。「ことわりやいかでか鹿の泣かざらむ今宵かぎりの命とおもへば」。帰つて来た御主人はこれを見て獵を止めたということです。このように情を歌つた価値の世界は、人の心を打つものでございます。

小式部内侍は若くして病気で亡くなりました。一周忌の正当に墓参して、涙と共に左の一首を母の式部は手向けました。『お慈悲のたより』にございます。「もろともに苔の下には朽ちずしてひとり憂きめを見るぞ悲しき」。親だから中々思い切れない。弁榮聖者も書いていらつしやるように、今までは色々と仏教の歌を詠んだ。その時代のことですから教養として詠んでいた。しかしいざ子どもが死んだ時には役に立たなかつた。こういう歌も詠んでいます。「小足にて辿り行くらむ死出の山道わかぬとて帰り来よかし」。帰つてきてくれという歌です。この逆縁の恩寵により真実に道を求め、播磨の国、書写山の性空上人の導きによつて、如来様のお光明をいただくことができるようになりました。今、お話しの前に「靈鷲の月」をお歌いしました。親は子のことを三十年近くも忘れたことはないと申します。又亡くなつてももう一回生き返つてくれないかと思ひます。そう

ならば私共の本元の真実の親である如来様は、一体どうであろうか。久遠劫来私共をお忘れになったことはありません。常に私共を思い続けておつて下さいます。ナムアミダブツと申しますが、ナムというのはやはりサンスクリットでございます。訳すといろいろな意味がありますが、礼拝儀の一頁に「至心に帰命す」とあるように、帰命すると訳されています。これが一番広まっている翻訳の言葉です。私の命を差し上げる、命を返す、これが帰命です。本元は如来様です。だから如来様の元に帰るといいますが、事実を言えば私共の本元に帰るといふことになります。大ミオヤは本元のオヤ様であります。そのオヤ様の処に私共が帰って行くということですよ。

お寺の奥さんはお盆が来るととても忙しい。普通奥さんはお盆に実家に帰る。お寺は中々そうはできません。奥さんは朝から夜まで働き通しで、お盆が過ぎて帰るといふことになります。子どもを連れて沢山の荷物を持って親のいる故郷に帰ります。それを見て「えらいものだなあ」とご主人の住職は思いました。「坂三里つらさが楽しさと帰り若葉のあなた桃の咲く家」。正月やお盆には荷物を持って長い坂道を登るが、けれど親がいるから楽しいという。

そのように私共の念仏修行も、親様の処に戻る事です。ちょうど私共に心の親がいる。私共はその心の親の処に帰るのです。そういう思いを以てお念仏をすれば、私共は大いに精進ができるでしょう。「靈鷲の月」はそこをお歌いになったものです。このようにオヤ様は久遠劫来、私共がこの無上の道に入って早く自分と同じ者になるようにならしてやりたい、と思ひ続けていらつしやるのです。

お釈迦様がある時、たくさんのお弟子の方がお集まりになつてゐる時、こう申されました。「皆さんは大いに修行して、既に悟りを開いている。無生・永遠の生命を悟つてゐる。処がその悟りに至るのには、一体どのような縁に触れて願を起こしたか、そしてどういふ道行きを通つて今日悟りに至つたかは、皆違つてゐる。そういう信仰の告白を、今こゝで無生の悟りを得た者がしたならば、新米の者の大いなる参考となるであろう」と。それに先立つてお釈迦様は「私共衆生は心を持つてゐる。その心には源がある。それが真如である」と言われ、衆生の心源、真如の深義の御説法をなさいました。それが『首楞嚴經』です。この御説法を、無生の悟りを開いてゐる人は自分のことのように喜んだけれど、新米の人の中にはどうもはつきりと分らないという人もいました。



今申しましたように既に悟りを開いた人でも、発願・発心したのはどんな縁で発願・発心したか、皆さんの中でも菩提心を起こしたと言つても、何に依つて菩提心を起こしたか皆それぞれ違います。発心の因縁は皆違ふが、起こした以上は無限向上の道・菩提道を歩む。歩んでゐるけれど、法門は八万四千とたくさんあります。どういう経路を経て無生の悟りを開いたかを言うことが、新米の人達の大きいなる参考となるであろう、とお釈迦様は言われたわけです。

お釈迦様のお導きに依つて一番最初に悟りを開いたお方を阿若橋陳如あにゃくきやうちんじよと申します。そのお方が先ず立ち上がりまして、発心の縁は何か、どういう修行の経路によつて無生の悟りを得たかというお話しをしました。そのあと次から次へと皆立つてお話しをしました。その時立つて信仰の告白をしたのは二十五人で、一番最後は觀世音菩薩、その一人手前は勢至菩薩でございました。勢至菩薩様はお立ちになつて、お釈迦様に五体投地なさいました。私共、十二光礼拝をしますが、あの礼拝の仕方です。実にうるわしく尊い処の御姿を以て、そのお声はお浄土の迦陵頻伽かろうびんがの声もかくばかりやと思われる程で、その信仰の告白をなさいました。

遠い昔、この世の中に一人の仏様がいました。それから次々と結局十二人の仏様がいました。その十二番目の仏様を超日月光仏と申し上げる。その超日月光仏の如来様が、こういう教えを私にして下さいました。それは念仏三昧の教えです。私共が今している念仏三昧の法門を、その如来様が未だ一介の青年であつた勢至菩薩に、教えて下さつたというのでございます。

大きな長者のお家がございました。この富み栄えた家庭に唯一人の幼い坊ちゃんが、たくさんの人にかしずかれて幸福な日暮しをしていました。処がある時、蝶々がお屋敷の高い塀を越えて飛んで来ました。坊ちゃんはその蝶々を欲しいと思いましたが、蝶々は又お屋敷の外へ飛んで行つてしまいました。そこで坊ちゃんは門番の隙を窺つて、門から外へ出まして蝶々を追いかけて行きましたが、捕まえることができませんでした。ところが大分遠い処まで追いかけて行くと、そこに乞食が居りました。「あら、向こうから子どもが走つて来る。あれは蝶々が欲しいのだな。それに立派な着物を着ている。いい家の子どもなんだろうな」と。目の前に子どもが来ると、乞食はパツと手を伸ばして蝶々を掴んで言いました。「坊ちゃん、上げよう。坊ちゃん、おじさんの里に来ないか。おじさんの里に

はこういう色とりどりの蝶々が、いっぱい舞っているよ」。坊やは蝶々欲しさに乞食に  
どわかされて、その乞食の里にやって来ました。

すると乞食の態度が一変しました。坊やは着ていた着物を脱がされて、汚い着物を着させられました。「おなか为空いた」というと、「今日から乞食の子だ。御飯が食べたいのなら、よその家の門口に立って物乞いして来い」と言われます。それから後は、乞食の子としての日暮しが始まったわけです。昨日までの幸福な日暮しは一変しまして、乞食のおじさんに怒られ通しの悲惨な毎日が続きました。寒くなりましたら「どこかから着物をもらつて来い」とおじさんは言います。ひもじいにつけ、毎日毎日食べたい飲みたいと、食べ物のことしか考えないようにになりました。

食べ物のことしか考えないというのは、動物同然と申すことができるではありません。この頃テレビをつけますと、ご馳走の番組をこれでもかこれでもかとやっていますね。あれだけというのであれば、動物同然でございませう。こういうふうにして、五つぐらいであった坊やは五年の月日ひびを閲してしまい、とうとう生まれ付きの乞食の子同然となつてしまつたわけです。

処がある時に、その子が或る大きなお屋敷の門の前に立っていますと、自分と同じ年頃の子どもが数人出て来ました。

その顔を見ますと、皆知性に光っているようであつて、圧倒されました。本を持っていきます。何の話しをしているかというとお勉強の話しです。そして乞食の子どもをちらっと見て向こうの方へ行きました。そこでその坊ちゃんは思いました。「私は飲み食いのことしか思わないが、私と同じくらいの子が、お勉強の話しをしている。あの人達と私とは、なぜこういうふうに違うんであるうか」と考えてみました。「そうだ、あの人達には教育さしてくれる親がある。私にはその親がないんだ。そういうためなんだ」。飲み食いのことしか考えない日暮しであるので、自分のお母さんのことを忘れ果てていました。しかしそう思ったその時、お母さんのことを思い出しました。そこで「お母さん」と呼んでみました。するとぼんやりだけれど、お母さんの顔が思い出されたのです。

児童心理の上から言つて、四つから五つ、特に五つというのが大切であります。人間の無意識↓下意識↓意識の心的プロセスを経て、自己意識―自覚に至るのは大体五歳位であると申します。次第に社会意識を持つに至ります。十歳となりますと、大体人間としての

理性の脳・大脳新皮質が一応できて、本格的に活動し出します。

一方お母さんの方は、行方不明になった子どもを人を使って捜させましたが、香として分かりませんでした。始めから子どもが無いのであれば致し方ないが、大切な後継ぎが一人いる。その子が行方不明になってしまった。お母さんはそれ以後、我が子のことを忘れたことはありませんでした。処が子どもさんの方は、飲み食いのことばかり思って、この五年間お母さんのことを思い出したことはありませんでした。

そこでその超日月光の如来様は引き続いてこうおっしゃいました。一方はものすごく憶い続けているが、相手の方はちつとも憶っていない。こういう場合は、この二人は遇うこともあろう。遇わないこともある。処が両方がお互いに憶い合うと、たとい百里千里隔たつておつても、双方の念おもいが感応するであらう。その時はさながら現実に相見ることがよくである。念仏三昧の法門はちょうどそんなものであると。

如来様は私共の親でございます。私共のことをお忘れになったことはありません。処が私共はこの世の中に生まれまして、如来様のことを全く忘れ果てゝいるわけです。飲み食いのことしか思いません。そういう場合は遇うこともある。遇わないこともあると。

けれど親である仏様のことを聞いたならば、私共遇いたいと思うであろう。遇いたいというのは情だ。その情が働くとき早く遇いたいと思う。すると髣髴として現前に在ますことを見る事が出来る。現在か当来(将来のこと)大慈悲の親様の温容を拝み、その聖意を知ることが出来る。

このように念仏三昧の法門は、親は憶い続けているが、子である私共の方は娑婆のことばかり思つて、親なる如来様をお慕いしない。けれど如来様・親様をお慕いするようになると、きつと遇える。超日月光の如来様は、私にこういふふうにお教え下さいました。かくの如くして如来様にお目にかゝることができて、終に無生の悟りを得ることができたと勢至菩薩はおっしゃったわけです。

法然上人様は勢至菩薩様の垂迹だ、と昔から言い伝えられております。法然上人様のお弟子の中に絵のお上手な方がありました。そこで法然上人様のお姿をお写ししました。「できました」と言つてお上人様の所へ持つて参りました。すると法然上人様が合わせ鏡をなさいまして、胡粉でそれを修正されました。そのお弟子は、その上に讃をしていただきましたと思つて持つて行つたのです。処がお上人様は少し修正して、そのまゝお返しになりました。

した。そこでお弟子はまた持つて行きました。するとそこに『首楞嚴經』の讚をお書き下さいました。

「我本因地 以念佛心 入無生忍 今於此界 攝念佛人 歸於淨土」(我もと因地 念仏心をもつて 無生忍に入る。いま此の界に於いて 念仏の人を攝して 淨土に帰せしむ)。こういう『首楞嚴經』の經文をお書きになって、法然上人様は源空と名前をお書き下さったわけです。弁栄聖者のお書きになったものの中には、あちこちにこのお話しが出ていますし、笹本上人様のお話しにもございます。

法然上人様にはお弟子がたくさんございましたが、そのお弟子の中に鎮西上人という方がいらつしやつて、そのお方の流れが浄土宗です。また西山上人という方がいらつしやつてそのお方の流れが西山浄土宗です。さらに親鸞上人というお方があつて、そのお方の流れが浄土真宗です。その親鸞上人様は非常に文才のあるお方でした。今でいうと詩、昔の表現をすると和讃、これをたくさん書いていらつしやいます。今申した話しも全部、詩に作つていらつしやいます。

「子の母をおもうがごとくにて 衆生仏を憶すれば 現前当来とおからず 如来の拝見

うたがわず」。こういう風にお作りになつていらつしやいます。しかし真宗ではあまりこれを力説しません。信を強調して全部如来様から貰うという話しをしています。しかし今申したお話しはこの詩だけではなくて、他にもたくさん作つていらつしやいます。鎮西上人様は三昧発得なさつたが親鸞上人様はというと、やはり慧眼と法眼を開いておられた。「私は開いておるぞ」とおつしやいませんが、開いておられました。その中のお歌、和讃を一つ申し上げます。

「弥陀の尊号となえつゝ 信しんぎょう樂まことにうる人は 憶念の心しんつねにして 仏恩報ずるおもいあり」。結構なお歌でございます。この歌は如来様のお光明を頂いた心の状態をお詠いになったものであります。「信樂まことに得る人は」ということは、お光明を頂いたならば、証執握つた証信が得られる、そうだから如来様がよけい慕わしく慕わしくなる。「憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもいあり」と。憶念とは如来様を忘れず記憶していることではない。念仏門では如来様をお慕いすることでありませぬ。だから親鸞上人様は如来様のお光明を頂いた光明生活の風光を、このようにお歌いになったのであります。

弁榮聖者の十三回忌が唐沢山でありました時、主催者である小黒法蔵さんが、笹本上人



様に『法華經』卷五如来寿量品第十六の偈頌の部分である、五百十文字の自我偈の御染筆をお願いされました。お上人様はそれを全部お書きになり、参加者はそれを拝見しました。昔は礼拝儀にそれが載っていました。『ミオヤの光』の「礼拝文の巻」を御覧下さい。『法華經』の根本のみ教えはこれにつきておると言われています。『法華經』全体の文字の数から言えば、約一三六分の一に過ぎませんが、殊にその終わりにある「本仏の大慈悲願」は次の如くであります。

毎毎に自らこの念を作なす。「何を以てか衆生をして、無上道に入り、速やかに仏身を成就することを得しめん、と」

このように私共が一心に如来様をお念じ申してお慕いするようになれば、よい訳です。これまで小高い山に上つて大海原を見たとか、高い山に上つて御来光を見たとか、感動するできごとにお会いになったでございましょう。いっぺんに如来様を慕わしく思えなければ、それを思い出すのです。それを方便としまして、親様を慕う情を以て一心にお念じするといふのも、工夫の一つでございませう。それではこれで終わらせていただきとうございませう。どうもありがとうございませう。

(同称十念)